

1. 特に効果的であり改善に資した事例

A. コースワークの充実・強化

③国内外の大学との単位互換協定やダブル・ディグリー等による教育課程の充実

特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

③国内外の大学との単位互換協定やダブル・ディグリー等による教育課程の充実

《人社系》

●立命館大学言語教育情報研究科言語教育情報専攻

「国際通用性を高めた言語教育専門家の養成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

カナダのブリティッシュ・コロンビア大学 (UBC) との協定により実施中の TESOL (英語非母語話者への英語教授) 資格取得プログラムに追加して、オーストラリアのサザーン・クイーンズランド大学 (USQ) と新たに協定を結び、夏期の 5 週間で完結する 2 つめの TESOL プログラムを開発・実施した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

既存のカナダの UBC との協定にもとづく TESOL プログラムは、2 年間にわたって履修するものであり、現職教員や社会人院生など、短期間での集中した履修で資格取得を希望する学生のために、オーストラリアの大学で実施する新しい TESOL プログラムの特徴づけを明確にして、2 つのプログラムの差別化をはかった。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

TESOL プログラム参加者の母体層を広げ、多様な条件のある院生にも資格取得の機会を増やすことができた。

《理工農系》

●茨城大学農学研究科

「地域サステナビリティの実践農学教育」の事例

(具体的に何を実施したのか)

連携先であるインドネシアの大学との実習科目(科目名、「熱帯農業フィールド実習」、「グループ課題演習」)の構築、共同実施、双方での単位化を行った。なお、茨城大学はプログラム開始時に、また、連携先は本プログラム終了時に単位化を行った。本プログラム支援終了後、その成果を連携先大学とのダブルディグリー構築に展開した。平成 22 年度は、両者でダブルディグリー・プログラムの内容構成、実施体制、学生支援体制をまとめた。平成 23 年度前期中に両大学で覚書を交わし、早ければ、後期から実施出来るように調整中である。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

海外実習や演習科目の運用では、その内容設計や実施体制の整備に関して、大学間で多くの議論を行った。また、実施時には学生ケアに関して特に考慮した。ダブルディグリー

1. 特に効果的であり改善に資した事例

A. コースワークの充実・強化

③国内外の大学との単位互換協定やダブル・ディグリー等による教育課程の充実

一・プログラム構築では、両大学における履修システムや学位授与基準の違いを精査し、双方の大学にとって実現可能なプログラムの設計に多くの時間をかけた。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

本プログラムを履修した学生のアンケート結果からは、①国際的なコミュニケーション能力の向上、②国際的なチーム作業能力の獲得、③現場での体験から生じる「アジアの熱帯農業と環境」に関する課題意識の向上、という成果が得られた。また、その成果を踏まえて、十分な議論を双方で重ねながらダブルディグリー・プログラムの構築に至ろうとしている点が大きな成果である。

●千葉大学工学研究科デザイン科学専攻

「高度デザイン教育プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

- ・人材養成目的に沿った科目構成の整理し、国内外の大学との単位互換協定を目的として、海外アライアンスプログラムを演習として設置した。海外の大学との共同によりプログラムを運営するもので、留学の足がかりになるプログラムとして機能している。
- ・デザイン・ダブル・ディグリー・プログラムを新設し、海外の大学との研究・教育の連携強化するプログラムを構築した。現在、上海交通大学、浙江大学との間で既に実施しており、平成23年度には、南洋理工大学（シンガポール）、清華大学との設置を目指している。また、浙江大学とは、ジョイント・トレーニング・プログラムを博士課程で実施しており、学生や研究者の交流を密に行っている。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ・海外大学との連携による海外アライアンスプログラムは、大学間の連携にだけでなく、必ず企業がプログラムに参加することで、実践的な内容を実施するとともに、提案したサービスやデザインが実社会で使用可能かどうかについても評価をいただいている。このように、3つの機関が参加する海外アライアンスプログラムは産業界の評価も高く、様々な企業からの参加の問い合わせがくるようになった。
- ・デザイン・ダブル・ディグリー・プログラムは、実践と研究をバランスよく実施するプログラムであり、各々の大学で作品または論文を審査することで学位を授与する。また博士においても参考作品を製作することや、作品を学位の要件の一部と出来ることなどを含めて学内の規定を整備し実施しており、専門人材育成のプログラムとして綿密に構成されている。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ・演習の充実によりPBL型の演習により海外での研鑽の重要性に対する理解が高まったとともに、参加した企業がどのようにグローバル展開を行っているかも理解でき、日本の

1. 特に効果的であり改善に資した事例

A. コースワークの充実・強化

③国内外の大学との単位互換協定やダブル・ディグリー等による教育課程の充実

デザインのおかれている立場より、それぞれがどのようなグローバル化を展開するべきかを体験できるプログラムとして構築することができた。プログラムを開始してからは、既に4名の学生が留学（交換留学）を実施しており、「海外へ出る」というモチベーションの構築にもプログラムは十分に機能している。

- ・デザイン・ダブル・ディグリー・プログラムでは、極めて優秀な外国人留学生在が在籍することで、日本人へ大きな影響を与えている。また、ダブル・ディグリー・プログラムの学生が持ち込んだ研究が、国際的な研究としても発展し、人材育成を通して国際的な研究連携が可能となった。

●広島大学理学研究科数理分子生命理学専攻

「数理生命科学融合教育コンソーシアムの形成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

明治大学、龍谷大学それぞれと大学間包括協定を締結し、両大学とは単位互換できる制度を整備した。実際に、広島大学の大学院生が明治大学で開講される数理系講義に参加し単位取得する例があった。また、逆に明治大学・龍谷大学の大学院生が、広島大学で開講される実習科目「プロテオミクス」あるいは「科学リテラシー概論」の単位を取得する例も出ており有機的な交流が実施された。それぞれの大学が持つ特徴を生かした講義科目を、学生が必要に応じて自由に選択できる機会を提供することは、コンソーシアム形成で目的とした項目の1つであった。学生にとっても、自身の大学で開講されないが将来のために取得したいと考える科目を、単位取得という明確な動機付けをもって真剣に講義に望めることは大きなメリットであると感じているようである。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

大学間で単位互換科目としてどの科目を認定するかを工夫した。広島大学では、明治大学・龍谷大学側ではあまり扱わない生命科学実験を伴うような実習科目および科学リテラシー、MOT科目などを提供することを特徴とし、明治大学・龍谷大学側では数理系基礎科目、現象数理系科目など数理系講義科目の提供を特徴とするような「色分け」を意識した。また、実際の実施にあたっては該当科目を集中講義として提供し、相互に地理的に離れた位置にある大学間での講義の聴講を短期滞在で可能とするようにして、学生が現実に聴講できる体制を整備した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

実際に単位互換協定を結んだ大学での講義を聴講した学生の感想から、普段と違う雰囲気、自身の大学では聴講できない内容の講義を聴くことができたことは良い勉強になると同時に、良い刺激にもなっているよううかがえる。広島大学・明治大学で単位互換講義を開講する際には、同時に学生交流会を開催して、学生間での研究発表会を行うなど「イ

1. 特に効果的であり改善に資した事例

A. コースワークの充実・強化

③国内外の大学との単位互換協定やダブル・ディグリー等による教育課程の充実

メント」も行い、学生同士が相互に知り合えるようにする工夫をした。このため、他大学に聴講に出かけた折にも講義だけを聴講して戻ってくるのではなく、友人関係をひろげ他大学の「文化」にも触れさせることで、自身の大学内だけで生活しているよりは多様な価値観を持つようになってきているようである。

●龍谷大学理工学研究科物質化学専攻

「東洋の倫理観に根ざした国際的技術者養成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

国際性を持った学生を育成するため、本学瀬田キャンパス、海外キャンパス (RUBeC) ならびにカリフォルニア大学デービス校の3拠点を活用した以下(1)～(3)のプログラムを実施した。

- (1) 本学瀬田キャンパスにおいて、ネイティブスピーカーによる英語プレゼンテーション、ならびに研究室指導教員による英語でのテクニカルライティングの実施。
- (2) RUBeC に2週間滞在し、英語によるテクニカルライティング、プレゼンテーションの演習を実施。また、学生はホームステイによる海外生活を体験し、国際性を養った。
- (3) カリフォルニア大学デービス校 (UCD) との学生交換協定を活用し、半年もしくは1年間の研究留学プログラムを実施。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

上記(1)のテクニカルライティングでは、研究室指導教員だけでなく技術英語に精通したネイティブスピーカーによる指導を組み合わせることにより、日本人が起こしやすい間違いについても焦点をあてて指導できた。(2)のRUBeCでの演習では、カリフォルニア大学バークレー校 (UCB) でも文章作成やプレゼンテーションを指導している講師を招聘するとともに、UCBの学生による自学習のサポートを併せて実施した。(3)においては、UCDと本学の教員が相互訪問することにより、研究内容のみならず、学生への研究指導の方法や技術者倫理とその教授方法についても議論を行った。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

国際性を高める教育プログラムにより、国際会議での発表件数はプログラム実施前が10件程度であったのに対し、プログラム実施後は平均して20件程度となり件数が増加した。加えて、国内学会を含めた発表件数も一人当たり1.7件が、2.0～2.3件と増加し、大学院学生がより積極的に活動するようになった。